

表現運動・ダンス関連記事の動向から見える ダンス授業研究の課題

——月刊誌『体育科教育』（平成19～28年度）を中心にして——

Future Challenges of School Dance Class :
Focusing on the Journal PHYSICAL EDUCATION from 2007 to 2016

片 渕 美穂子
Mihoko KATAFUCH
(和歌山大学教育学部保健体育教室)

2017年7月27日受理

要約

本稿は、月刊誌『体育科教育』を資料として取り上げ、平成29年の移行期間を経て平成30年から始まる学習指導要領の改訂へ至る過去10年間に掲載された表現運動やダンスに関する記事の整理から、これからのダンス授業研究の課題を提示する試みである。平成29年に出された学習指導要領の改訂の要点を確認し、考察の対象である『体育科教育』の表現運動・ダンス関連の記事を整理した。その結果、表現運動・ダンス授業の今後の課題として、教師の指導力、アクティブ・ラーニングへ向けた教材開発、原理論的研究の必要性が導き出された。

はじめに

平成30年度に予定されている新しい学習指導要領の改訂にむけて、平成26年度11月中央教育審議会に『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』の諮問がなされた。平成28年度中には答申・改訂が出された。本稿では、月刊誌『体育科教育』を資料として取り上げ、平成29年の移行期間を経て平成30年から始まる学習指導要領の改訂へ至る過去10年間に掲載された表現運動やダンスに関する記事の整理から、これからのダンス授業研究の課題を提示したい。

1953年9月創刊の『体育科教育』は、体育・保健体育の教員、スポーツ現場の指導者、そして研究者の投稿記事から構成され、一つの記事の分量は多くの場合2～4頁である。内容は、学校現場の実際に即した報告や授業実践の報告、新しい教材開発の紹介、学術的な見解などである。出版元の大修館によれば、発行部数1万部、読者の8割が小中高の教員、30～40代が中心読者であるという¹。『体育科教育』は別冊も発行されているが、本稿で焦点をあてた平成19年から28年までの間に、表現運動・ダンスを内容とした別冊は発行されていない²。

1. 新学習指導要領の改訂の要点とアクティブ・ラーニング

平成20・21年版学習指導要領においては、小学校、中学校、高等学校を通じて「心と体を一体として捉え、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツラ

イフを実現する」資質・能力の育成が謳われた。平成29年に出された学習指導要領においても目指すべき資質・能力は変更ないが、従来の「技能(運動)」「態度」「思考・判断力」の3つの観点から、「知識及び技能」「思考・判断力、表現等」「学びに向かう力、人間性など」という「三つの柱」とされた。

また新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」、いわゆるアクティブ・ラーニングの実現に向けた授業改善が方向づけられている。アクティブ・ラーニングという用語は、もともと1980年代に米国の大学教育改善の文脈の中で使われ始めたものであり、日本においても平成24(2012)年8月、中教審の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」以来、政策用語として使用されるようになった³。その答申におけるアクティブ・ラーニングの定義は、次のようになっている。「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。」平成28年12月に出された中教審の答申ではアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が求められ、学習の内容及方法の両方を重視し、子供たちの学びの過程を質的に高めていくことが目指されている。「何ができるようになるか」を明確にしながら、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」という学びの過程を、「カリキュラム・マネ

ジメント」を通じて組み立てていくことが重要となる。上記のような「主体的・対話的で深い学び」の実現、アクティブ・ラーニングの視点から授業を変更していくことが求められている。そこで、以下第2節では、これまでの表現運動・ダンスの実践がどのように行われ、またそれに関する議論がどのようになされて来たのかを見てみよう。

2. 表現運動・ダンス関連記事の整理

以下の表1は、平成19年から28年までの月刊誌『体育科教育』の中に掲載された表現運動・ダンス関連の記事、総計51編の内訳である。

表1

表現運動・ダンス関連記事内訳 (平成19～28)		総数 51
1	学習指導要領の解説、改訂に関する記事	5
2	体育科教育学の立場からの論考	21
3	実践報告 小学校	10
4	実践報告 中学校	6
5	実践報告 高校	1
6	舞踊研究	3
7	エッセイ	4
8	その他	1

2.1 学習指導要領に関する記事

平成20年に出された学習指導要領および解説に関する補足説明的な記事が、平成19年5月号、平成20年3月号、6月号、平成24年2月号にそれぞれ1編ずつ掲載されている⁴。村田は平成19年5月号の中で、次のように解説している。運動領域の特性と学習内容に関しては、表現やリズムダンスは自由(非定型)で創造的・生成的な学習、ゴールフリー的な「探究型」を特徴とされる。表現運動・ダンスの学習では、生涯学習に向けて「いつでも、どこでも、誰とでも」踊りを自発的に楽しむ力の育成が狙いである。平成20年3月号では、平成20年1月の「答申」をうけて新指導要領の方向を射程にいて、「表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容」と授業につなげる「習得・活用・探求」との関連について整理している。ダンス領域は3つの内容で構成され、小学校から高校への12年の発達を「4・4・4の区分」で示す特徴がある。表現・創作ダンス、リズムダンス・現代的リズムのダンス、についての解説が行われている。後者についてはどんなリズムの曲を取り上げていくかが内容を決め出す重要な手になりとなる、技能については体幹部でリズムを取って踊ることが教授法を指導のポイントとする。

茨城県保健体育科指導主事による武道およびダンスの実施状況の実態と課題の報告も掲載されている。武道については97.5%、ダンスについては80.3%の学校

で実施されていると報告する。武道必修科の課題としては施設の問題が挙げられている。ダンス必修化の課題として、系統性をふまえた指導資料の作成、男子のダンス履修のための工夫が必要とされている。

新しい学習指導要領および解説が平成29年に出されたが、その前年にあたる改訂期における問題を扱ったものが1編出されている。高橋和子による表現・創作ダンスの系統性を踏まえた技能に関する、新学習指導要領及び解説を参考にした概説である⁵。創作ダンスの「技能」には最低限度教えるべき内容が凝縮されているとし、さらに「創作」「運動」「表現」の3つに分けて「技能範疇」の明確化を試みている。創作ダンスの評価は、何を表現したいかに応じて「良い動き」が変容することを押さえれば、可能になるとされている。

2.2 体育科教育学

体育科教育学の立場からの記事は幅広く、原理論・歴史的論考(4編)、教材研究(8編)、授業方法・評価法研究(8編)、報告(1編)があり、その中の教材研究はさらに、創作(3編)、リズムダンス(3編)、民舞(1編)に分けられる。以下それぞれの概略を示しておく⁶。

2.2.1 原理論、歴史的論考

高橋和子は、平成20年度からの「ダンス必修化」を受けて、その理由を健康志向と生きがい志向から考えうるとしている⁷。ダンスとは大地との対話を再生させる「からだを拓く」ための通路であろうと、述べている。課題として5点(気軽に踊れるダンス教材の開発、小中9年間のダンス技能や知識の精選、初心の指導者向け教材と指導法の提示、教員研修とリカレント教育の充実、「からだ」と「気づき」の学びの再生)が挙げられている。明治から今日に至る学校ダンスの変遷を、明治中・後期、大正・昭和初期、第二次大戦後に分けて、学校ダンスの内容と社会における舞踊・ダンスの動向から解説しているのが、松本である⁸。男子にダンスが「解放され」、ダンス必修化にまで至ったことに触れ、男子が学ぶための鍵は男子教員にあるとする。中村は、平成10年の改訂をうけ移行期における教育現場の授業計画の変容に関する継続的アンケート(東京都公立学校教員)をもとに、これからのダンス教育と展望と課題を示している⁹。まとめとして、ダンス教育の充実は教員の努力とする。

平成28年3月号に掲載された岩田の論考は、明言されているわけではないが、次期学習指導要領の改訂へ向けてなされていると思われる¹⁰。武道とダンスの今日的課題を探るという題目のもと、ダンスについては「リズムダンス系」の問題が焦点づけられている。筆者である岩田は、中心的課題の議論の深化の必要性を指摘し、原理的な検討や考察が希薄なままであるとする。そして、「再現としての表現」(模倣)という視点が

「リズムダンス系」の授業にも向けられるべきとしている。

2.2.2 教材研究

宮本と中村による教材研究の記事は、中学2年で実践した「彫刻の森」を例として、「みんなで作る、踊る、見る」を味わえるグループ創作のポイントを紹介している¹¹。群を活かした「いい動き」、「極限」や「多様」に広がるような問いかけの仕方として、まずは「極限をつかむ」ことに繋がるように、「おもいっきり」体をつかった表現になることをつかませる、次にイメージの言葉を使って多様性を引き出すとしている。グループ活動に働きかけて引き出す「いい動き」のために、「活動の仕方を教える」と「グループの極限と多様性を引き出す」が挙げられている。

高橋るみ子は、子どもや生徒の興味関心が表現や創作ダンスに向かうような「気がつきゃほら、ダンス」の授業の紹介（「夜の動物園」）をしている¹²。「模倣から表現、そして創作へ」という段階が不可欠であり、このことは中高生および大学生にもあてはまるとされている。5枚のダンスシーンの写真を次々に再現できるように練習させ、はじめと終わりをつけて1つの作品とする活動である。そのダンスにしていくな活動が学習者と指導者がもっとも成果を実感する部分であると述べている。細江は、これからの表現・創作ダンスの授業に向けて、三つの提案、「踊るからだ（身体感覚）を育てる」、「見る、振り返る学習を効果的に用いる」、「自分の表現をつかむ」をしている¹³。また、「いつ、なにを、どう教えるか」については、①初歩的段階（小学校低・中学年）、②進んだ段階（小学校高学年、中学校1、2年）、③より進んだ段階（中学校3年・高校1－3年）に分けて概説されている。リズムダンス・現代的リズムのダンス：津田によるリズムジャンプ（リズム感を身につけ運動能力を伸ばすもの）を使ったダンス指導の紹介をしたものがあった¹⁴。それはヒップホップダンスを、「動き」ではなく「リズム」から学習しようとする提案であった。前田は、小学校におけるチアダンスの可能性を探っている。小学校で行う場合チアダンスの特徴として、①チアスピリット、②ポンポン効果、を挙げ、単元計画の目標に関しては、関心・意欲・態度、思考・判断、技能、知識・理解にあたるものを提示している¹⁵。授業作りのポイントとして、「音楽との関連性」、「フォーメーション」、「教師の手本」の三つをあげている。現代的リズムのダンスが一応の定着をみたところで、中村は現代的リズムのダンス＝ヒップホップというかたちになっていることに対して再考を促している¹⁶。ヒップ・ホップダンスが定型の動きを習得するダンスと誤解されているという現状が指摘され、自主創造的なダンス学習としての内容と方法の確立の必要性が、訴えられている。

2.2.3 授業方法・評価

ダンスの必修化に対応して、ダンス授業の指針や要点についての記事の掲載がなされている。松本は、ダンスの授業づくりや指導を目的とした、3つの観点と12項目からなる授業評価票を提示している¹⁷。グループ活動場面に着目して子供たちの発話記録を取り、またそのグループの各子供の授業評価との関係を提示している。授業分析は教師がもっと知りたい関心事を簡単なかたちで目の前に見せてくれる方法だとしている。

4学年ごとの区分が示されたことを受けた内容になっている記事が、いくつか掲載されている。特に小学校5、6年と中学校1、2年時に焦点づけられていた。他者とのコミュニケーションに消極的になる時期である小学校高学年から中学校に対してのダンス授業における3つの提言をしているのが、牛山である¹⁸。その3つの提言は次の通りである。①「身体表現によるコミュニケーション・スキルを高めることをねらいとするワーク」を導入した授業プラン、②小学校高学年の「ダンス」へのモチベーションを高める取り組み、③小学校高学年での表現運動の学習内容と中学校1年で行うダンス学習内容についての双方の小中引き継ぎ連絡会の充実。そして牛山は、身体表現による小学生にコミュニケーションスキルを高める学習内容が、体ほぐしの領域だけではなく表現運動・ダンスの中で強調されてよいとまとめている。

三宅は、教師がダンス授業を行うにあたっての要点を次のように提案している¹⁹。考え込む時間を与えずに次々と動きの特色を活かしていく、皆で踊って楽しむ。三宅は「課題学習法」で創作ダンスの教育的価値を理解したと述べる。初めてのダンス授業のために、単元計画作成のポイント、指導案のポイント、毎時間の反省、生徒の感想用紙作成、創作作品に合う曲を素早く選ぶ、という5点を挙げている。伊藤も創作ダンスの指導の要点を次のように解説する²⁰。良いモデルを教員が示すこと、生徒と教員の心配を解消すること、教師が生徒にうまくなる術を伝えること。生徒はどうしていいかわからない、教員も動いてもらえないことを心配している。この問題の解決としては、例えば「しんぶんし」の教材がある。表現運動の授業研究から言えることは、イメージの探求を重視したクラスと、動きの探求を重視したクラスでは、後者の方が有能感をもつことが明らかになったとする。

宮本は、ダンスに携わる機会が少なかった教員に向けて、創作ダンスを中心にした「ダンスの入口に生徒達を導く学習指導」を提案する²¹。指導者が課題を示しその課題を学習者が解決するスタイル、グループでの創作、「鑑賞する」学習過程があるという。

ダンス教育研究の第一人者である村田は、ダンスの必修化は他の運動領域とは違い、ダンスの学び、つまり「心身の解放」、「身体による豊かなコミュニケーション

ョン」、「いま・ここから作り出す問題解決学習」を共有するチャンスであるとする。「最大の課題は教師の指導力である」²²とまとめている。

現場でのダンスの授業が定着していく中で、ダンスの指導についても反省の記事が掲載される。平成25年7月号は、「体育指導要領を検証する」の特集記事が組まれた。その中で木原は、ダンスの指導実践の中で見えてきた成果と限界を述べている²³。成果としては、彼自身が行った授業における生徒への調査から肯定的な意識が高まったことがわかり、4点の楽しさを整理している。限界として2点、ダンスの特性とは何かという問題、ダンス技能の指導技術に関してダンス授業にどこまでの成果が求められているのかという問題、を挙げている。

2.3 実践報告

2.3.1 小学校

小学校における表現運動・ダンスの実践報告をさらに、創作、リズムダンス、民舞・フォークダンスに分類すると、それぞれ3編、2編、4編であった。

創作：牛山と伊藤による記事では、小学校と中学校をつなぐ教育活動の一環としての、「固まりくずし」の3つが提案されていた²⁴。①小学校高学年および中学校1年生に共通で行うことができる授業内容。②小学校高学年「ダンス」へのモチベーションを高める取り組み。③小中引き継ぎ連絡会の充実。高学年の「表現運動」と中学校「ダンス」との繋がりに関してコミュニケーションスキルを高めることの必要性が指摘されていた。「特集『動きのよい子』を育てる幼少年期の体育」の記事として提出されているのが、長町による報告である²⁵。そこでは、表現運動における「よい動き」を、経験したことのない動きを「発見」すること、「イメージと動きの関連性」を自覚すること、と考えられている。「習得を図る学習活動」と「活用を図る学習活動」の学習活動を準備する、6年生の活動の実際として、「俳句」を題材とした表現の実践報告を行っている。カメラ撮影によって自己評価する活動により活動そのものが深まるとしている。「よい動き」は、習得したことを活かして子どもたちの体から発したものの、考えられたもの、とまとめている。3つ目の記事は、高橋るみ子による、宮崎大附属小学校における外部講師によるワークショップ型の授業の背景と実際についての報告である²⁶。外部講師は舞踊学研究室が立ち上げたNPO法人に属するダンスユニットであり、4年生の3クラス120名にそれぞれ4回ずつ、ワークショップ型の授業を表現運動として実施されている。児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験ができたと報告している。

リズム：小林による小学校5年生を対象とした、ヒップホップダンスを内容とする報告²⁷。小林は、ヒップ

ホップダンスの特性4つを挙げ、ヒップホップのリズムを感じさせるためには、「良い動き」の設定と「指導の手立て」の明確化が必要とする。そのための手立てとして、6つ(①踊り方の比較、②口伴奏、③座った状態でのリズムとり、④立った状態でのリズムとり、⑤学習カードの作成、⑥踊り方をカードにまとめる)を挙げている。2つ目は、湯浅による小学1年生を対象とした単元の授業実践の紹介。踊ることの抵抗感を取り除き、リズムによって踊る楽しさを実感させるための目標と指導内容を明確にしている。抵抗感を緩和するための手立てとして3つを提示する。リズムによって自由に踊ることは心地好いが、そこに至るまでにはいくつかの壁がある、との感想を述べている。

民舞：手塚は、学校改革の一環として「ソーラン節」導入の試みを報告している²⁸。ソーラン節は、運動量と難易度からも適当だと判断されている。体育授業6時間で動きを学び、「総合的な学習の時間」で学年練習、「行事」扱いで全体練習を行う。法被の寄付もあり、学校の立て直しから誇りと自信を持つまでになったという。2つ目の実践報告は、松本、酒向による小学5年生1単元分(6時間)のフォークダンスの授業づくりである²⁹。挑戦課題を「〇〇しながら一体感を感じられるかどうか」を設定している。3つの要点(①曲に合わせる、②同時に動く、③同時に声を出す)で一体感を得られるとしている。3つ目は、小学校4年生における郡上踊りを学習教材とした、武山・島田による実践報告である³⁰。郡上踊りの一般的な特性の説明、および子どもからみた特性の説明がなされている。仲間との一体感を楽しめた、曲のいわれや歌詞の意味からのイメージを伝えたと踊りが深まった、これらが子どもの感想として挙がっていたという。

2.3.2 中学校・高校

創作：七澤は、指導言語がダンス授業においてどのような役割を果たすかの検討を、中学校全14時間のダンス単元計画を通じて行っている³¹。多様なイメージと動きを発見させるための指導言語、作品を創って行く際の指導言語、ミニ発表会の際の指導言語について考察している。生徒達の一般的な傾向とその対処が紹介され、最後に授業の録画による検証がすすめられている。宮本は、中学1年生男女教習の8時間を「鑑賞」の視点で振り返ったものを紹介している³²。1時間目：具象的でわかりやすい映像を作品鑑賞。2時間目：ダイナミックだったかの視点。3新聞紙を使った作品づくり。グループ同士でみせあう。4時間目：「走る一止まる」、キーワードは「メリハリ」。5時間目：「集まる一とびちる」、グループの人数が多くなる。6時間目：「見せたい」と思うようになる段階。7時間目：「スポーツのいろいろ、ミニ発表会」この時間は、「見られる」ことを意識する。8時間目：映像鑑賞と

評価。学習を支える工夫として、学習カード、教師の示範は大きく、を挙げている。高校における実践報告である中村の記事は、いわば舞踊表現の基礎づくりともいえるものである³³。直接的に創作の授業を展開しているわけではないが、ここに分類した。

中村は、進藤貴美子のいう「今ここの自分のからだや動きに気づく」ことを授業実践の中で中心としてきたという。そして、中村は「総合的な学習の時間」の中で「ライフスキル」というテーマでボディワークを行い、「骨格を知る」「立つ」など、動きそのものの持つおもしろさを探り、そのことが舞踊の表現力を高めていくことにつながるのではないかとまとめている。君和田は、現代的なリズムダンスは課題解決型の学習を目指すべきであるという立場から、ヒップホップではない現代的リズムダンスの授業展開を、次のように紹介している³⁴。1時間目「ヒップホップ風ケンパーダンス」、2時間目「ロックのリズムで動くー止まる」3時間目「できた動きをつなげて簡単発表」。

2.4 ダンス・舞踊研究

舞踊研究の記事は、ダンスセラピー専門家英二による記事³⁵、森田・酒向によるダンス教授法の方法論の紹介³⁶、舞踊という運動を身体科学的観点から概説したもの³⁷の3つである。1つ目の記事では、ダンスをはじめのための、筆者創作による感覚を目覚めさせるダンスエクササイズを紹介がなされ、安心して体を休める場の必要性、自発的な動きにまかせることが提案されていた。森田・酒向は、ダンスノーテーションを紹介し、その重要な2つの特性は「基本的な動き」「動きの創造の重視」であると解説し、課題授業の形式の流れも紹介している。水村はクラシックバレエの運動を身体科学的観点から概説し、踊る身体を実践することによる4つの運動効果(柔軟性への効果、姿勢への効果、神経機能への効果、シェイプアップ効果)についてコメントを付けている。

2.5 エッセイ

ダンス教育の研究者によるもの1編、学校現場の教員によるもの3編、合計4編があった³⁸。研究者によるものは、雑感と言った体のものであるが、教員によるものは、1つが一年間大学での研修の中で踊るおもしろさを実感した経験により、現場に戻ってから即興を中心とする表現運動の授業に取り組んでいるというものであり、残りの2つは、教師である筆者たちのダンス授業実践のための報告である。どちらも失敗や反省を踏まえて取り組んでいる経過が記述されている。

3 今後の表現運動・ダンス授業研究へ向けて

前節において、平成19年から平成28年度までの記事を整理し概観した。本節ではそれら記事群において指

摘されている表現運動・ダンス指導に関する問題を、3つの視点、教師の指導力、主体的対話的学習(アクティブ・ラーニング)へ向けた教材開発、原理論的研究の必要性、から検討したい。

3.1 教師の指導力

ダンス指導の指導力については、本稿で整理してきた記事から伺えるところでは、性差による指導力の違い、指導言語がキーワードとなっていた。歴史的に振り返るならば、「女=観られる身体」という図式が近代ヨーロッパにおいて成立し、踊ることが観られるものであれば、必然的に舞踊は女の領分となってきた。事実日本における学校制度において、女子がダンス、男子は武道、というカリキュラムも存在してきたことは言うまでもない。取り上げた記事群でエッセイ3本のうち、2本が現場の男性教員によるものであることは、おそらく編集側の意図的なものだったろうと筆者は予想する。『女子体育』においても、「男性教師に学ぶ」、「男性教員による初めてのダンス指導」、「男子だけの現代的リズムのダンス」、「初心者でも男性でもできるダンス授業」といった記事が掲載されており、ダンス=女という図式を払拭しようとする表れと見て取れる。現在、一般社団法人ダンス教育振興連盟(JDAC)は、学習指導要領を網羅する内容で、数多くのダンス研修会を開催してきている³⁹。また、リズムダンスや現代的リズムのダンスの社会的なイメージは、性差のないダンスであり、現状での性差による指導力の違いは、縮まっていくのではないかと予想される。従来ダンスの教材研究は蓄積されており、成果を上げてきたように思われる。必修化によりそうした蓄積が実際の授業で多く展開されることにより、新たな教材研究の開発にも繋がるだろう。表現運動・ダンス授業の指導を不得手と感じる指導者には、自己が実践することはもちろんであるが、舞踊作品を多く観ることが必要であろう。授業レベルにそれほど高いものを期待できなくても、理想となるイメージを持っていない指導者は、自身も面白くないし、その消化不良の心情は陰に陽に授業に影響を及ぼす。また、教員自身がダンスによる或る種の「美的体験」が必要であることも、同様の意味においてそうである。熟練の指導者と未熟練の指導者では、「声かけ」が違くとされる。子どもから動きをうまく導き出すことができる教授方法の技法の開発は、今後とも必要となるだろう。

3.2 主体的対話的学習(アクティブ・ラーニング)へ向けた教材開発

平成29年に出された学習指導要領、学習指導要領解説では、主体的対話的学習(アクティブ・ラーニング)が柱となっている。本稿における考察の対象である『体育科教育』では、アクティブ・ラーニングについて記

述された記事は1編のみであった⁴⁰。しかし、「学校ダンス・ダンス教育に関する内容の豊かさは他に類をみない」⁴¹とも評される『女子体育』では、2016年8・9月号に「アクティブ・ラーニングによる表現・ダンス指導事例集」が特集されており、その巻頭言において細川は「自主創造的な学習を目指してきた日本のダンス教育は、既に長年に渡って『アクティブ・ラーニング』の趣旨に合った指導法を検討、実践してきたといえます」⁴²として、ダンス教育の研究者として自負を述べている。事実、授業ではグループワークやグループ・ディスカッション(これを対話的学びと言っていいたい)を通じて作品が創作されていく。単に言語活動だけではない。実際に身体性を通じた対話を行うこと、具体的には、踊ってみて考えた通りにはいかないことに気づき、フィードバックする。頭脳の作業ではなく動きながら創作する過程がある。ペアやグループでの作業では他者の身体との接触を通じてのみ可能な動き、むしろ身体性が知識・理解を生み出すような過程がそこにはある。法則に従った「正しい解答」が存在するわけではない表現運動・ダンスであれば、どのようなコミュニケーションやワークによってどのような身体的な体験が生み出されるのか、どのような過程を経て動きの創作が登場するのか、そこに他者はどのように介在する可能性があるのか、このような検討が求められるだろう。本稿で取り上げた『体育科教育』の記事の中には、ICTの活用を中心的な内容とするものはなかった。ICTの活用により主体的・対話的学習(アクティブ・ラーニング)を促進するような授業研究も必要である。

3.3 原理的研究の必要性

岩田は、「リズムダンス系」に関する問題として、原理的研究の不足を指摘している。「追求すべきリズムダンス系の学習活動の中心的な課題性がどこにあるのかについて改めて議論を深める必要性が示されています。…『リズムダンス系』の位置づけに関わる原理的な検討や考察が希薄なまま今日に至っているのではないかという感がぬぐえません。」⁴³そもそも現代のリズムとはどういうリズムをいうのか、なぜ現代のリズムなのかは、不明瞭なままである。「ヒップホップ」、「ロック」、「サンバ」といった用語が新旧学習指導要領に登場しているが、さらなる明確な定義はなされていない。ロック自体がかなり広範囲な音楽を指すものである。このことについて図式化した説明の試みは存在するが、現代のリズムが表現運動・ダンスの学習にとってどのような意義を有するのか、不明なままである。さらに言えば、リズム系ダンスについての原理的研究を進めていくと、踊ることが体育という教科の中に存在することの違和感を感じることになる。

学習指導要領には「リズムに乗って全身で踊ること」

を、「身につけることができるよう指導する」という記述がある。おそらく「リズムに乗る」ということがリズムダンス・現代のリズムのダンスにおける眼目なのであろう。この「リズムに乗る」ことは、競争性、規則性、身体性、遊戯性の構造をもつ近代スポーツとの結びつきよりは、音楽との結びつきがはるかに強い。音に連動しさらには身体そのものが音と不可分の状態になることが、「リズムに乗る」ことの理想なのだとすれば、踊ることはスポーツや体操ではなく音楽の一部となろう。音響人類学者の山田はこう述べている。「踊ることは、音楽することの重要な一部であり、音楽の身体的実践にはかならない。人は音楽に接したとき、なぜ自分の身体が動きはじめるのか、なぜ踊りはじめるのか、おそらく意識することはない。人は、音楽に導かれるようにして、ただ踊る。だが、そこにこそ踊る身体のコツはあるのだ。」⁴⁴つまり、「ダンスは音楽とともにその身体的世界に生きている」⁴⁵のである。音楽と踊ることの不可分さは、なにもストリート系ダンスやサンバなどに限定されるものではないことは、いうまでもない。かつて木村は、ダンスの身体的運動の部分のみが切り取られることによって、ダンスが体育授業の中に取り入れられたことを指摘したが⁴⁶、この問題は、リズムダンス・現代のリズムのダンスに関しても解決されているとは思えない。ただ、ダンス教育に関する実践的研究が長年にわたり蓄積され、踊ることの本質が、視覚的で運動形態的なものよりは、むしろ踊る者の感覚に見いだされるようになった。その結果「リズムに乗る」ことが目指されるようになったと考えられる。社会的で現実的な営みである学校教育における授業の実践と理論とは簡単に合致するものではないのかもしれないが、表現運動・ダンスが体育の中で展開されることの原理論的な説明は、どのようにして可能なのだろうか。

終わりに

新学習指導要領及び解説が出されて、今後それに従った実践研究が蓄積され、発表されていくだろう。それと同時に、表現運動・ダンス授業研究に関する原理的な研究が進むことを期待したい。

註

- 1 http://www.taishukan.co.jp/files/mediainfo_taiikukakyoku0203.pdf より。
- 2 なお、本稿記事収集の対象期間中に出版された別冊の副書名は次の通りである。別冊20「新学習指導要領準拠 新しいマット運動の授業づくり」、別冊21「新学習指導要領準拠 新しい跳び箱運動の授業づくり」、別冊22「新学習指導要領準拠 新しい鉄棒運動の授業づくり」、別冊23「新学習指導要領準拠 新しい体づくり運動の授業づくり」、別冊24「新学習指導要領準拠 新しいボールゲームの授業づくり」、別冊25「すぐに使える・どの子も夢になる体育授業のジャ

- ンケンゲーム50」、別冊26「学習指導要領準拠 新しい走・跳・投の授業づくり」
- 3 山地弘起「アクティブ・ラーニングとは」『女子体育』58巻（8・9号）2016年、14-19.
- 4 村田芳子「表現運動・ダンスの学習内容について考える」『体育科教育』2007年5月号、pp.35-39. 村田芳子「表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは？」『体育科教育』2008年3月号、pp.14-18. 柴田一浩「『ダンスと武道の必修化』で直面する課題をどう解決するか」2008年6月号、pp.40-43. 高橋和子「創作ダンスで身に付ける『技能』とは何か、それをどう評価するか」2012年2月号、pp.28-31.
- 5 高橋和子「改訂期のダンスでいま、何が、どう問題か」『体育科教育』2016年3月号、pp.16-19.
- 6 研修会の報告記事については省略している。
- 7 高橋和子「なぜいま『ダンス必修化』なのか？」『体育科教育』2008年3月号、pp.20-23.
- 8 松本富士「ダンス授業を振り返る」『体育科教育』2007年5月号、pp.34-37.
- 9 中村恭子「ダンス教育の展望と課題」『体育科教育』2016年3月号、pp.28-31.
- 10 岩田靖「武道とダンスの今日的課題を探る」『体育科教育』2016年3月号、pp.10-14.
- 11 中村なおみ、宮本乙女「表現・ダンス：体から溢れる気持ち・思いのこまった体」、「表現・ダンス～関わり合って多様にひろがる」『体育科教育』2007年8月号、pp.5-8, pp.50-51. 中村なおみ、宮本乙女「表現・ダンス～関わり合って多様にひろがる～」2007年9月号、pp.54-55.
- 12 高橋み子「よい『創作』はよい『模倣』から」2008年3月号、pp.32-35.
- 13 細江江利子「小中高の表現・創作ダンス「いつ、なにを、どう教えるか」『体育科教育』2008年3月号、pp.24-27.
- 14 津田幸保「リズムジャンプを使ったダンス指導」『体育科教育』2013年6月号、pp.46-47.
- 15 前田幹夫「ダンス必修化とチアダンスの可能性」『体育科教育』2013年7月号、pp.52-53.
- 16 中村恭子「『現代的なリズムのダンス』=ヒップホップダンスという‘誤解’を解いて自主創造的なダンス学習へ」『体育科教育』2016年3月号、pp.28-31.
- 17 松本富士「ダンスの授業を振り返る」2007年7月号、pp.34-37.
- 18 牛山眞貴子「つながると見えてくる答え」『体育科教育』2008年、2月号、pp.37-38
- 19 三宅香「『初めてのダンス授業』を失敗しないポイント」『体育科教育』2008年3月号、pp.28-31.
- 20 伊藤美智子「教師も夢中になるダンス指導を目指して」『体育科教育』2010年3月号、pp.66-67.
- 21 宮元乙女「『初めてのダンス』指導に挑戦するための学習指導過程」『体育科教育』2008年12月号、pp.42-45.
- 22 村田芳子「必修化をチャンスに、今こそ面白いダンスの授業を」『体育科教育』2012年9月号、p.9.
- 23 木原慎介「初めてのダンス指導を通して見えてきた成果と限界」2013年7月号、pp.34-37.
- 24 牛山眞貴子・伊藤幸「マイナスの経験がプラスの経験を生む」『体育科教育』2008年2月号、pp.39-43.
- 25 長町裕子「表現運動の良い動きを育てる『習得』『活用』の学習活動」『体育科教育』2010年6月号、pp.50-54.
- 26 高橋み子「芸術家と協働で創る表現運動の授業」『体育科教育』2012年2月号、pp.24-27.
- 27 小林治雄「リズムと表現を楽しむ『ヒップホップ』の授業」『体育科教育』2008年3月号 pp.40-43.
- 28 手塚二郎「『ソーラン』教材を活かした学校づくり」『体育科教育』2007年4月号、pp.38-43.
- 29 松本拓也、酒向治子「『またみんなで踊りたい』フォークダンスの授業づくり」『体育科教育』2014年9月号、pp.60-63.
- 30 武山有香、島田左一郎「楽しい郡上踊りの学習を創る」『体育科教育』2016年3月号、pp.40-43.
- 31 七澤朱音「生徒の動きが変わるダンスの指導言語」『体育科教育』2008年3月号、pp.44-48.
- 32 宮元乙女「『鑑賞』を活用して表現の技能と理解を育てる学習指導」『体育科教育』2012年2月号、pp.32-35.
- 33 中村安希子「『今ここにいる自分』を感じて歩く」『体育科教育』2012年2月号、pp.40-43.
- 34 君和田雅子「ヒップホップだけじゃない!!もう1つの現代的なリズムのダンス」2016年3月号、pp.48-51.
- 35 美二三枝子「ダンスのもつ力と可能性を考える」『体育科教育』2008年3月号 pp.10-13.
- 36 森田玲子・酒向治子「ダンスの言語がダンスを変える～ダンスデノテーションと創作活動～」『体育科教育』2008年3月号、pp.50-53.
- 37 水村真由美「踊る身体を科学する」『体育科教育』2008年3月号 pp.54-56.
- 38 高橋和子「創作ダンスの指導は難しくないのだが」『体育科教育』2012年2月号、p.22. 山崎大志「『即興』のおもしろさを求めて」『体育科教育』2012年2月号、p.22. 中澤卓二「自分が動かなければ生徒は動かない!」『体育科教育』2012年2月号、p.44. 宇都宮茂樹「この年になって」『体育科教育』2012年2月号、p.45.
- 39 <https://www.jdac.jp>
- 40 高橋和子「改訂期のダンスでいま、何が、どう問題か」『体育科教育』2016年3月号、pp.16-19.
- 41 松尾、高田他「『女子体育』誌にみるリズム・現代的なリズムのダンスに関する記述の動向と今後の課題」『広島体育学研究』39号 2013年、p.14.
- 42 細江江利子「アクティブ・ラーニングを先導するダンス指導」『女子体育』2016年8・9月号、p.4.
- 43 岩田靖「武道とダンスの今日的課題を探る」『体育科教育』2016年、3月号、p.13
- 44 山田陽一「響きあう身体：音楽・グルーヴ・憑依」春秋社、2017年、p.142.
- 45 同書、p.166.
- 46 木村真知子「表現運動論ーダンスはなぜ体育なのかー」杉本厚夫編『体育教育を学ぶ人のために』、世界思想社 2001年、pp.245-260.

